

しい生面を神話研究の上に開いたものといへよう。(菊判二九八頁、東京目黒書店發行、定價三・〇〇)(柴田)

○岡本道可傳

岡本 勇著

岡本道可は江州甲賀の七黨伴氏の出、天正十一年尾張の星崎に生れ、十一歳の時より一本の槍を頼りに所謂渡り奉公人として轉々主を換ふること九人、最後に伊勢の藤堂和泉寺に仕へて大坂陣に武功をあらはし、數次加増をうけて知行千石、鐵砲頭の地位にまで上つたが、然も偶々その意に協はぬことがあれば直に主家を立退いてもとの浪人の身となり、優詔を以て再三召返へざるゝに及んで遂に藤堂家の家臣として生を畢へた。その名は必ずしも偉大を以て稱するに當らないであらうが、その七十歳の生涯は「歩行足輕の時より一國一郡をも望む事侍の本意」なりとした戰國武士の一典型としてまた傳ふるに足るものがある。本書の記者は道可直系の後裔とのことであるがその祖先の行履を述べるに當つて濫に子孫としての私情を挾まず、一々家藏の文書資料を引用し、たゞ道可その人一人のみならず、廣くその周圍の關係者の事蹟を稽へて、淡々たる筆致の中によく當時の侍の身の浮沈や、その意地やかたきを敘してゐる。蓋し、廣く時代の心を顧み、武士道發展の跡を論ぜんとする人の一讀興味すべきところであらう。(菊判和裝一九八頁、非賣)(柴田)

○後醍醐天皇宸翰集

國民精神文化研究所編

國民精神文化研究所は、かねて皇室御撰集の謄寫を計畫してゐたが、その第一として後醍醐天皇宸翰集が公刊せられた。

「天皇の宸翰に對しまつれば、國民は 天皇の御安業のうちに履ませ給ひし御艱難の道を偲び奉るとともに、また御修練のいや堅く坐せしを目のあたりに拜しまつるのであつて、中興政治の御聖謨のいよ／＼高く尊きを仰ぎ奉るのである。本集を讀みて刊行する意義も亦實にこゝに存するのである。」と、本集の序文に見ゆる如き趣旨のもとに、同研究所々員西田直二郎博士の監修、囑託赤松俊秀氏の編纂及び解説に依つて成つたのである。

收むる所十五點、天皇の御眞蹟として確かなる徵證のあるものゝみを精選し奉つてゐる。即ち、東山御文庫御藏の御消息(帝室御物)、堀部功太郎氏藏の慈道法親王御消息並天皇御返狀、鹿王院藏の御消息並後宇多天皇宸翰御返狀(國寶)、岩崎男爵藏の御消息、教王護國寺藏の東寺正中元年御置文(國寶)、鴻池男爵藏の和歌懷紙、仁和寺藏の御消息、鰐淵寺藏の御願文(國寶)、出雲大社藏の寶劍代繪旨(國寶)、大德寺藏の大德寺御置文(國寶)、教王護國寺藏の東寺元弘三年御置文(國寶)、金剛峯寺藏の御願文(國寶)、前田侯爵藏の御感狀、三寶院藏の天長印信(國寶)、根津嘉一郎氏藏の愛染明王像勅贊などである。

これらの宸翰をそれ／＼コロタイプ版に附し奉つたのであるが、いづれも原寸或は原寸に近き大きさを保ち寫眞撮影並びに印刷に當つた便利堂の優秀なる技術と相俟つて、御筆蹟の御神蹟を傳へ奉るのに、些かの間然する所もない。而して言ふまでもなく、これらの宸翰は年時を明記し給はぬものが多いが、別冊として添附せられた解説は、夫々に明快なる年時及び内容の考證論究をなし、是亦本集が後醍醐天皇宸翰の研究に於いて規準的な地位を占める所以をなしてゐる。更に収録の圖版の首めには、大徳寺藏の御眞影を置き奉り、天皇の英邁の御姿を偲び奉るよすがとなしてゐる。

我々は本集に接して、後醍醐天皇の御宏業を欽慕し奉り、その勝れさせ給へる御筆蹟の研究に志す者にとつて、永く憑據となるべき意義深きものであることを知ると共に、事に當られた諸氏に滿腔の敬意を表するものである。(長二尺一寸豎一尺六寸、圖版十七葉、東京國民精神文化研究所發行、定價十二圓普及版七圓の豫定)〔時野谷〕

歴史地理の研究

魚澄惣五郎著

(内容目次)

(所要頁數)

- 第一、日本歴史地理と古代村落 (三二頁)
- 第二、河内、和泉、攝津、三國に於ける氏神鎮座地に關する研究 (八〇頁)

- 第三、風土記に現れた地名 (一三頁)
 - 第四、峠について (一三頁)
 - 第五、郷土史研究と社寺 (三七頁)
 - 第六、歴史より見たる但馬國山川の流域 (一六頁)
 - 第七、室町時代における丹波地方 (二二頁)
 - 第八、丹波久下氏と久下谷 (八頁)
 - 第九、山名、赤松、細川、三氏の隆替 (四一頁)
 - 第一〇、大楠公の本據地とその地理的環境 (二一頁)
 - 第一一、大阪城の回顧 (二六頁)
 - 第一二、大阪市鎮座の神社 (二四頁)
 - 第一三、中世の大阪 (二〇頁)
 - 第一四、歴史より見たる布施附近 (九頁)
 - 第一五、奈良寺院造立の流行と開墾田 (一一頁)
 - 第一六、吉野川上流の古刹運川寺 (二〇頁)
- 本書「歴史地理の研究」は、著者魚澄惣五郎氏が最近數年間に起稿された論文、十六編を今回一冊にまとめて上梓されたものである。
- 同種の研究領域に屬する數編の論攷を集め或は日本經濟史の研究と稱し、或は又日本思想史の研究と題する著者を世に送る事は、我國出版界の一ツの風として、我々が屢々經驗する所であるが、本書も亦かうした形式の下に既成の論文を編纂出版したものであると思はれる。
- 従つて此の點は本書の最も著しい特色であつて、その内容も